

失われゆくもの  
——茅戸——

時代の移り変わり、人々の生活の変化、それによって失われていくものがあります。それはそれで仕方ないものだと思う。ほんの数十年前までは、地域の生活にとつて無くてはならなかった物が、今はほとんど必要とされなくなり、そして消えてゆく。そのような中に、山で暮らす人々と密接なつながりのあつた茅戸があります。

御岳山には、茅戸が二カ所あつたようです。その一つは大塚山の東斜面、そしてもう一つは、日の出山に向かう途中にある野中と称する畑の周辺です。大塚山の茅戸は、現在杉林になっており、茅戸の名残などにもありません。昔はこの茅戸に、ナデシコやオミナエシなどがたくさん咲いていたと、かつて老女から聞いたことがあります。茅戸が残っていればそれはもう綺麗なお花畑になっていたことでしょう。一方、野中の茅戸は残っています。但し、今はネコの額ほどの広さしかありません。

さてこの茅戸に生えている茅ですが、当然のことながら御師の家屋の屋根の材料として使われています。御師の家は、普通の民家に比べかなり大きいので、使う茅の量も半端ではなかつたことでしょう。今年も誰それの家の分、などと決めて刈り取っていたのだらうと思われま

す。それでも一屋根分の茅が採れたかどうか疑問が残ります。現在でも数軒茅葺き屋根の家は残っていますが、材料の茅は、富士の裾野あたりの物を使っている



夏越しの大葎

ようです。茅も地産できないなんて、少し寂しい気がします。

でも茅戸の茅は、屋根だけに使われていたわけではありません。それは、六月の晦日に行われる、水無月の大祓の茅の輪に使われているのです。大葎が近づきますと、神社の職員が総出で茅戸に出向き、茅を刈り取り神社に運びます。骨格となる竹の輪に刈り取ってきた茅を巻き付け、茅の輪ができます。茅野輪の周囲にもまんべんなく敷き詰めます。以前は、地面の上に直接刈り取ってきた茅を敷き、その上に神職一同が座つて神事を行っていたので、座布団のように厚く敷き詰めなくてはならなく、かなりの量を必要としていたようです。現在は立つて行うようになりましたので、以前より茅は少なくなつたようです。それでも一人が二抱え以上刈り取らなければ間に合いません。

茅葺き屋根の家も数えるほどになり、利用価値が無くなつてしまつたと思われる茅戸ですが、神社の神事に使う貴重な茅を採取する茅戸として、大事に残しておかなければならない貴重な場所となつているようです。

表紙写真 鈴木 新吾

「雲海と雲流」

神社へと流れ来る雲々・神社から流れゆく霧の川 日本民俗は自然の中に、神の領域を垣間見ます。

あとがき

生きとし生かされる者という言葉聞いた事があると思います。人間は「こころ」を持つ事が他の動物とは違つたと聞いた事もあります。でも人間以外の動物も「こころ」を持っている事でしょう。人は、生きていくには無く、生かされている。即ち、周りの多くの物事が、自分を生かさせて下さっている。その事を受け止め、感謝する事。ありがとう・おかげさまの気持ちを持ち、分け与え、誰かを生かす事が出来る。それが人のすばらしさだと思います。神様・自然・人・全ての存在に感謝し、美しい日本のこころを伝えていきましよう。

俳句選者金子先生、入間川青年会中島様、ピジターセンター片柳様には、玉稿をありがとうございました。

平成二十四年三月八日発行

(年二回発行・非売品)

編集 武蔵御嶽神社

TEL 0416(7) 8500

FAX 0416(7) 9741

http://www.musashimakejinja.jp/

印刷 (株)成和印刷